

詩篇150篇

- 1 ハレルヤ。神の聖所で、神をほめたたえよ。御力の大空で、神をほめたたえよ。
- 2 その大能のみわざのゆえに、神をほめたたえよ。そのすぐれた偉大さのゆえに、神をほめたたえよ。
- 3 角笛を吹き鳴らして、神をほめたたえよ。十弦の琴と立琴をかなでて、神をほめたたえよ。
- 4 タンバリンと踊りをもって、神をほめたたえよ。緒琴と笛とで、神をほめたたえよ。
- 5 音の高いシンバルで、神をほめたたえよ。鳴り響くシンバルで、神をほめたたえよ。
- 6 息のあるものはみな、主をほめたたえよ。ハレルヤ。

「ハレル詩篇」の第五、そして百五十に及ぶ詩篇集の最終篇となります。この壮大な詩篇集はひたすら「ほめたたえよ」と叫ぶ神賛美でもって締めくくられます。まるで天と地がひとつになったかのような共鳴が響き渡っています。

1 節：すべてのものに求められる賛美

本篇の内容は、シンプルでありながら、驚くほど力強いものです。どこで賛美するのか？「神の聖所で」（1 節）——つまり、神のご臨在の中で。そして、「御力の^大空で」（1 節）——天にも地にも満ちる神の偉大さの中で。賛美は、教会の中だけではありません。空の下、日常のすべての場所で、神の御業をたたえる声を響かせるのです。

2 節：なぜ賛美するのか

なぜ私たちは賛美するのでしょうか。それは、神の行なってくださった数々の「大能のみわざ」（2 節）のゆえにです。天地創造、イスラエルの救出、教会の誕生——そして何よりも、**私自身が救われたこと**のゆえに。さらに、神ご自身の「偉大さ」（2 節）ゆえに賛美するのです。神がどんなに素晴らしい方であるか。それにふさわしく、私たちが惜しみなく賛美をささげましょう。

3～5 節：どのように賛美するのか

ここには次々と、楽器や身体を使った賛美が描かれています。角笛は、勝利を告げるラッパ。立琴や琴は、心に響く弦楽器。「タンバリンと踊り」（4 節）は、喜びの爆発的な表現。「緒琴と笛」（4 節）は、天に向かうやさしい旋律。「シンバル」（5 節）は、胸に響く打楽器の音——。音楽と身体を通して、感情と力を込めて、神を賛美する姿が描かれています。賛美とは、単なる習慣ではありません。いのちが躍り出るような、神との交わりそのものなのです。

6 節：誰が賛美するのか

最後のこの一節は、人間だけでなく、すべての「息のあるもの」（6 節）、つまり「生きとし生けるもの」すべてに対する呼びかけです。鳥のさえずりも、風に揺れる木々の葉も、海の波の音も、すべてが、無言のうちに神を賛美しています。そして、私たち——この地上に生かされ、息をしている者として、今日も「ハレルヤ」と声を上げましょう。生きていくかぎり——この息があるかぎり——賛美をささげ続けるものでありたいと願います。

詩篇の最後の最後。この壮大な賛美の呼びかけは、すべての歴史を、すべての命を、神の栄光へと帰させます。人生の終わりも、この地上の歩みの終わりも、「ハレルヤ！」で締めくくることができたなら、どれほど幸いでしょう。今日も——ハレルヤ！主を賛美します！